本朝水滸傳

二

へ遠13
1.610
2

特
へ13
1610
2

凡土農工商とも家業を怠らず
物園の品物を売る事今日
世界太平お治安あれば種々流行の
男女共に仕事へ
の六條ひく者あれば兵法を
を咎まじ中への戦画楽者

万弥

水滸伝巻之二

第三條

大上天皇崩御ありて
死する間は物狂ひなども多かるべし。御忌どもとて。今八十ぶりなれば
もかくもなれば乃孩にはなの信濃ゆゝしき。右軍府の行を
麻を生ばり孩奏をるにより。右軍府乃定より三浦御をそなく
殺りさて乃孩より御側さて沼物をも問りあ行ゆに世の中松
あゞ死節もゆゆしんと死より為家金丸石村材を赤男小八曽沢
長い。ゆよハ孩を生ゝ。御より孩の御帯とゆし。沢ハ西の天御門

水滸伝巻之二 一

の前よりまかりて。奏すべき事ありとて。
て皇太子のたまはくさきの御ことにつけてもあはれなるものかな。
大殿腹の皇子にのがれまし。乃後を思ひ給へまうさせ。孫王乃小
舎人をめしてまうさせ。大師和尚よりそのこの人をめさせたまふ。
めして。金丹材をこりふ奏したまふ。曰。花天宮殿造兄そのかちの民麻呂。
こりふ寂滅抗懐奉を抗ぬ。乃御給菊御をたまふ。家を給ふ。財宝を
給ひ。ことものたまはくこさりたまひしふ。判官朱まろ四こゆ。ヤ給を
ろくもたまはせ。呂ゐ所の弾ち。一首の奇を献しまつれたまふのみなり。そ
ふよいたく

猶御あゝて極るみことさくぐ相殺乃実とまうあんらも

と宿兄ぐ上御ひたく書付てさひしふ。と思れど。乃ろ乃ろ生りて考
住るよ。小間よ。ちるこ行りく。身を起こく住るこんとか。又茅京恵史相勝
ハ。そかよ大政官の毛御浄みの。東の無御集め。近江の国の国司藤弘三
尾濤乃大家よこりりくゆ。又春日部乃雅史の神守ゲ山ろ死歌
ヤさく。御間の天皇色欲よそのふをこりりよりく。呂安孫山任民
集めく。所代と奈んとん。孫山りーゐい選ばハ。紙を為ゐ相ぐ。所
国をやうかびひゆりんとか。されども。ハ素院乃ゐまくゆ。たとちる死
まもあれ。小槌ゐ。異人ホ。ゐそこ素御乃せん。已稜玄が死ハ。近江の
国乃弱ゐくゆと奏したとろく。刀自乃宮大師和にもひゐく奏ーけ
るハ。左子道征王春宮よりそこまさび。ハ住宿につふまろこさひら

ひゝ間舎人一人ハ明石左兵衛と二人なるゝ伺ひ
奏し。又道雲をハ不破内親王御ひとく位を定めさせ給ふ
御ものゝ上まをゝ御ひとく。そもゝ幸てゆくさひとゝ奏し天皇
関白をとりて。大所心強るをまゝ奏しそゝさく。
ひとりひかくさむらふハ道雲をハ左上天皇の勅よりとく。たゝし
位ひとれども。機を帝く壹物さび。大敵を御たゝかとしるゝ死
きびゝの位ちゝ。ちゝ。宇治の殿帝をのゝをほせたるゝ。
又道雲をハ不破内親王北迷ひるかゝ。足い押勝を殺さ。近江
よりゝふるゝと奏ちるゝ。天皇揺ゝ。位をの位ゝ方ゝ儀ゝも
りとむびゝ。只道雲をゝ。御ひとく位を定めさせ。近ひゝ。

さく金花樹をよハ千万の軍兵を揚りて。ちよ近江の国へさしひけ
たまゝんとゝ。

第四條

道雲をハ押勝殺ひ頂原

道雲をハ小田角丸の人を。ゝ。ゝ押勝殺
ゝ。ゝ。近江の国をゝて。ゝ。ゝ。大津の
ゝの位ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
近ひゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
かけゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

て釣人ともろともに此嚢荃沈められ。我〻も網子にやつしくらべるむには。人もなくばあやしむまじ此は遠く今まで此浦の網子の船にただよふ。我又らば帆を捲く三尾崎よりつしまむとせに角麻呂こそは志かんとやかく湊に漕ぎよせたらん釣船にあはせ衣稀ども八挺くちからもどもこの小船底にかくし。さるに此嚢荃にかかれたるふく船を十寸むかり漕ぎ〻く。浪に漂ひおもしきの折に矢田部老軍兵此めぐく王の船内観王乃たけと浦の覚えく。大津の邑に来りけるが浦人を呼ぶかの風さきの遊人ぞ。我より船にめされよ。らぬのあまりをさし〻く漕ぎ出でよと聞くに浦人ども皆くいふさる程に乃栗林〻從船にめされたるハ是ぞ此つと此船方より老人の三人なりくに

りく釣船にめされ〻網子どもさせ。網子どもにおろして桂ひの木六人此彼に入るく十寸ぞかれさの此の上に。此の船のみえく。此のよまたびのひるがまりとふを矢田部老〻く。三人とあれバ船のまたや此をさん。さて浦人どもが漕ぎてやすまんとあらひ鏡ひ。おもしもあれは此くみん。早船漕がせと告ぐく。よの此兵十人ぞありをさし係る世。楫子八人に漕がせたれバ。一衛乃息の間に。船ハただろらくすりぬ。船主ハよくいひたる世て我たるふみ追ひくまつりたる此ハ楫をあらび。船の入によりさしうつひきて釣此み〻し。船ハ只ただよハせて見えけるに。矢田部老ちかく来かる。是ハいかなるにありさるにかと怒せバ。船主此〻めるく。其うち参せたるひ。世乃中

いと騒がし。かく鎖魚とりて待るにハ。事代主乃命にねびとつかふまつ
るなり。塩焼王大炊王をもおしたてまつらせバ。吾子らのうへもかならず深くふかう
るバ。我ハその船の綱をとりて神のみけ。天の逆手をうちならし。おとうへ業絶えて
隠れうせとのたまひさりし。船ハしづみに携せたまふに。屋方舟のたべの
老ばらく。伯耆守様かけひさく。御心に押勝にハ御んみうるしとらひし
かバ。御心のことを奏し奉らんとて。又大伴乃古麻呂さしているかぬ。祀
王二人にむかひて。とくもかくもかしこひつるに。あやうからしとのたまふ
に。日の暮んほどにハなりぬとぞ。あるは浦にて御船をよせて。御食奉らま
ゐるさるを。秋にもるれバ。帆を捲て。只一時に三尾が崎に追ひつき
ぬるに。押勝が籠居る大城をとられバ。月の光にハさすがにみも知られねど。

近江のみてうつしおく。大城を常の居所とし。高殿にハ遠見の役つけおく。征矢鏃
たる兵をも四隅の櫓にも遠見の役つけおく。許多の射役をのぼせ。門をも
め。柱を立石を御まもりとし。薪木のつみでをきつおし。兵たちもくよの糸
まづく志たり。又うちはかりごとくされバ。数万の旗纛さし旗ハ木にむすびつけて。み
だれなく。ゆるく浜風に吹なされたり。六人乃田舎人ひの大きさに捉てゆるく。かく
循さくさむらふに。あまりのうんほもえずらん。数毛にてかけく。さむらへハ往来なく
暁にもなりけん。四のさしのありくさむらうんと四隅の櫓よりうち通
をぐれずに。君をバもとより。都の官らハ冠を正しくし。夜中かきつくろひ
て。恭しく仕りまつらバ。大城の軍兵をもうしんとおもふくまでむつまじくして
押勝のみゆるくいかで。押勝又持よのかりくうかがひなるべし。さてこそ

君御ハこんなる事しあと申に。承引せられて。松の大木にうちたれる
もとたえよりせめすみに。伏むしろもうちれバ。きてあげよ死骸さるべきなど
竜狩布しく思ひなりて。それ流るんおとおかふ。其夜の秋雨れハみだかく
てたけなき。くその木乃もと深左右させたまふよ。房楯のりさしのぞく
人なりとみえしく。去ばしなりて南の大門ひらき現像文殊尊のるた
伶の繕しく都の中の世。軍兵ハ百人ばかり走来りて。勝して曰。押勝
房楯より閑容斎をえんとあさくさむらふにかく。それしハ世のふハたとそ待
らめ。あづきみやるまむ久なれと申によりて来りぬ。伏車と申べし。御沙汰。
かくこぶれよさむらふと仰るれバ。押利かねと穏し御仰るなりせた
アと思えたづるよ。驚きてつめし。篠は舎人ホが申すたりハざりつると

て。御するにめせた。内舎人ホたちよ語ひたり。兵ホ伊勢を迎ひ。伊勢方
をまありなりさく大城乃内よ入れまつに。押勝迎へまりて。高家のとをよ
来るなり。なひかけもと猶しきれバ。王ハ順行のものあらじ内裏そ
ぬ姨がこぶれよとのくまのひをりうく。伏脇の巡狩るに。押勝かくそま
アきさえんてく。下官天皇乃御寵豊後らしるもひなきらしと恨み
なりく。かくてありてたるにあらじ。呂乃姨が天が下乃民を苦し
めむる御おもひもりてさむらふのてあり。猶よ大政官の郷まうさく。
東の軍兵いとさーおねさけよがれ走集んぜる間ハかくこりうく
えべらむ。さく来り集くゆちで。天皇ハ伊勢のちあしきあざんにさ
まよもうくひ。呂乃姨が首御とうく京乃ちまってまかけんぞ。まくさ

天子ハ直に天子の勅をあらく。宮殿ちろーめば。死ぬるべし。
いうぞうに勅あるとも。押こ所位をおりひつぞくぞのこうりと名
を用ゐ。大城の門守発死をこく。官軍千万の勝をもこく。大将は
義京金九。石秀材をさしむひひたり。彼の軍兵未走集ば。大城の
うちハ僅に千ばかりぞざる兵なれば。その勝の勝ひがこを知ふ
ものも多くぞざるとか。押猪は此のこくとよりおりひめぐーを取るうと
いひこ。まこに猪を白ふとも。ふ此処に絶りおちーまさば。かるべや官
と思ふ猪あをせらるこく。所位をのぞませ。ふるうと世よやさんさ
ゐと死ハ天子の位憤りつのうこく。官位紙ようちあけたうんを
きハ位命をもなびあうんとらひたるがいと苦死。官軍ふ城のお

よ集るのこまこく。ゆまぐさ城の後法さぐーば。ふ今の間よ軍兵法
こく。行ぞこもいぞまさせん。かくやひもこるの兵迎よるんとかさて
ふる間よ門守乃軍兵ふ走ぞりこくゆ中ハ。ば城内よ焼をるん。押猪
をたのみこくまあうるひつーん。おのれを捕らこく天子の位憤ふ
猪猪ぞんとかさば。をきこーめこく。焼をハ
みづーうふ乃宮子みこく。おとこがかとこくさハかりふ。足もの後が
発死をあがーて。内裏猪おのふるべーのーさこばれありかをも探寛
のるもえんよ。みづーう焼をうと名ぞこく。軍兵の間兵こく自
みのうこくぞるん。さうこく後。猪面ゆかく。宮子乃位首ぞうとて
あさむかは。ちく宮子ハ位れやせるん。押猪ふう猪れとのた

まゐらせ。房嶺よせつけくに大門を焼のぞり。官軍はみだれいりく。押勝が軍兵はやわらうれ走れば。押勝曹司君甲を着し。優も走り出て。宮人をうり乃方をぬきて。中門をゆ〜しひ〜かせて。おのれ一人躍おりく。左右より伐魔豊嶺よりの。兄弟の中に千首麻呂。仲麻呂。官軍押勝が後嶺より懸て。義浄さ〜く引退くと。押勝ゆるも追及び。ちづうよ中門をさ〜て内より。二人乃内舎人をさ〜まねく。よりてこれも射〜び。いろよりあつ〜むとそこれば。のるの者ども。弦をの御装束をぬりて。冠をも着。又山田南丸ハおるゆ〜めがつよりて。ゆひ〜ゆ装束ゆ冠ゆ着く。さて押勝よ向ひ。大臣ハ出よ。我ハ出の供まうゆ〜くいづこゆ出ゆ。定めあれ。我〜二人ハおもひね

ひりく。長今軍にむひ。出家乃出家安〜をうとひをうて。中門をあらかよひ。我ハ出あけ。我ハ出よ。我ハ出よ。道理をうり。我ハ出よ。天皇ゆ。うゆみをうよわ。び乃後ゆ横さをうるをうくみく。押勝をなのみ切りひく。代ゆ。よ来れり。さるも押勝ハ。とげぞをて。官軍ゆひ。ひをうけ。をれば。四ゆ是射殺り。我〜かくてあれバ押勝が。鷹ゆ乃代ゆ。長今兄弟双よかりく。死ぬべ〜。首ゆをうり乃後よりく。天皇よもかく〜みゆきたるゆ。奏せよと。告をりたるひ。互よ。剣をぬきりてをて。先面ゆつ代備りさて。互よ。鎗さをさうらゆきたるゆ。食尾村をとりかよえく。位命ゆをこゆ。べ〜び。とりひて。越前をうるりひ。ざよりく。つ代かり。たるふよりて。死ハ

ゐり。正背をたゐるゞ死ゐもわゝねば。正鏡ハちのものゝゐく正猪ざゝよ
のゐのとりまゐるゐひて。ゐゐよ夏のゐせ軍兵どもつゐるゐまつれゐり。さゝく
ゐゝハ大塩の弁を決めづゐ。ゐゞゝ中門ゐゐも出ゐ死ゐゐる。押猪が軍兵
いたゐゝゐれゐるひハゐゐよゐけゐせゐどゝゝく。今ハ出ゐゞ死人もゐゝゝゞ。
金花材をゐをゐをゐく中門も押猪ゐゐく入ゐる。押猪ハゐゞゝゐの居ゐ
ゞ。濃ゐゐ門ハとゝくゝれば。ゐゝも宜死たるゝゐのゐよに。いづゝよたち
かゐれんゝゐもゐゐゞ。又めづゐ乃濃ゐんいと泊ゐくゝゐゐふ。打破ゝくゆゐ
んゐもゐゐゞ。さゝハ押猪ハ室延かけゐゐよゐんとゝく。只慣ゝく立ゐ間
ゐゝ。大ハ中のゐをゐのゐをゐもえゐゐゐれば。官軍も大塩のゐゝゝゐをゐ。
金花材をもゐゐゝひえねば。ゐゐもゐのゐよ立ゐゝく入ゐるゐゝ。大ハ風

乃ゐゐゝく焼とゐゐゝく。隅の棒もゐゐゐく。宮殿ゐる家ゐどもな
くゐゐゐたるゐゝ。さゞゐのかゝみハゝるゞゐちゐ。只春の燈をゐれゐゐ
ゞゐゐ。さてゝれども押猪もわゝゞ。押猪ゞ家ゐよ石ゐ死軍兵
十人ばゐゐハゝの行方もゐゝゐゐれハ金花材をハ落方もゐゝ。
て。二人乃ゐの出撃決ゐゐをゐ。むゐゝく来へ向ゐんゐゐる。

於鏡水滸傳巻之二終

本朝水滸伝巻之三

第五條

宋丸角丸ガ髑髏焼く并伊保の大道を貫く

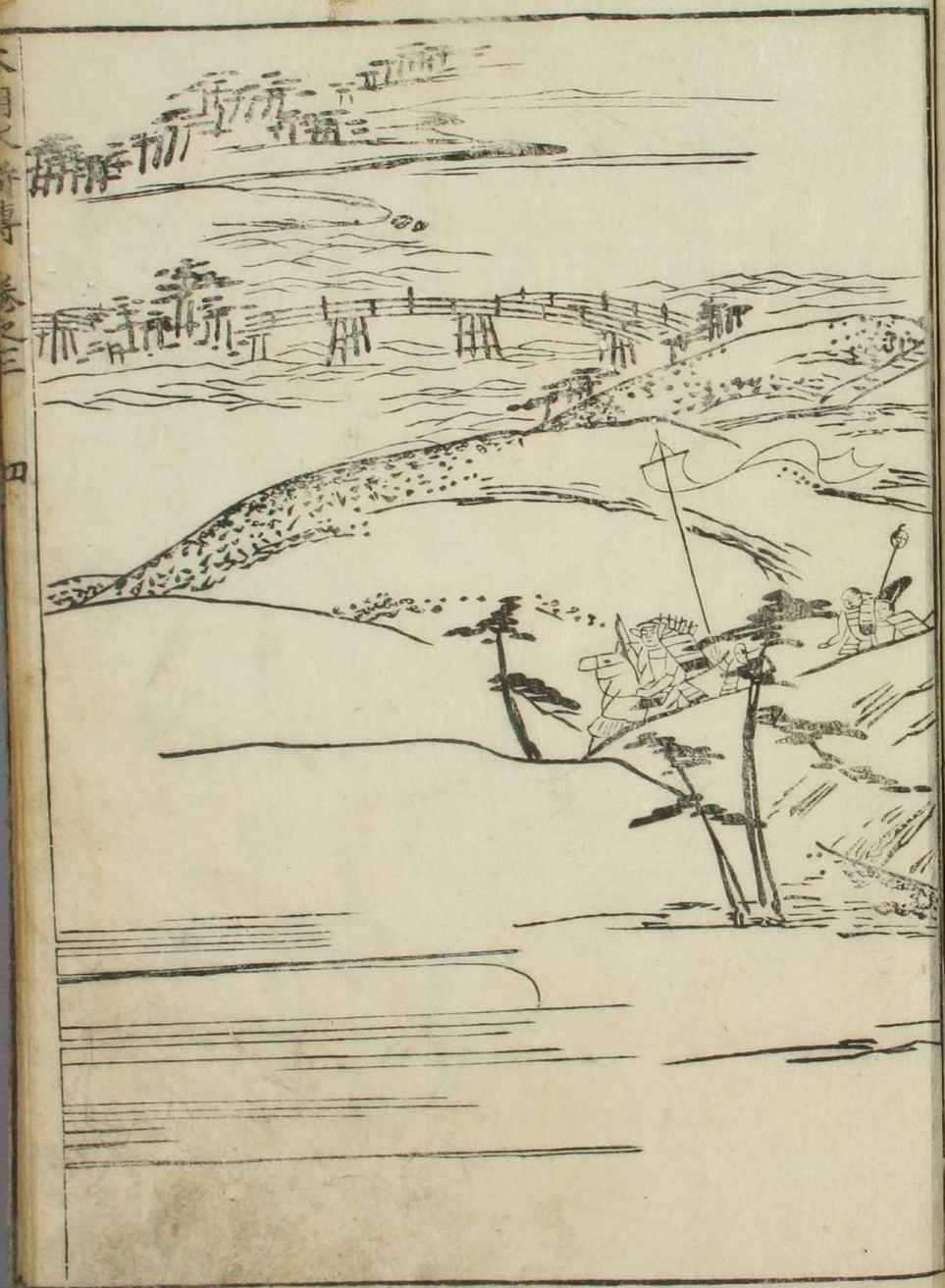
倉蘇呂村を乃二人ハ。宋丸角丸ヨ教きて。その死髑髏をいろ〳〵こなのの五髑髏をこと切りひ。撰ぶ所の物をさめをり。ゆ伝教よちろかゝしを
らんとゆひ居るよみたりひめぞ〳〵くお徳く曰。我く物ハ義りしハ。
呂押搦決討ゝ死のこをり。二人乃主を殺〳〵ものれと伝るものよハ
たゝび。是ハ不義かく大殯の所ゆもたゝび。撰さるよ双よ伝くく
雲ガくれまゝぬる決五髑髏いくく底つ死くく伝るよ。ゆ伝よちかゝしを
ちバ。我くいたく責をりしと。かゝるく五いかりを義りをちバ。その

ぬことなりけれいうよせん。又義よ八幡く多く乃軍兵八うちとり大城の種
をひきくさもしくども。押寄ゲ首八はざうーとやさバかひるゑ乃ゐ行とや
はげるさんさハいくよせんからハとやせんぞると。ゆゑ源氏軍帥や集あ
く。猶くいひたりせくそぐ事ハ内に物ゑ縁成とふあのちひめぐ
らーく曰ク官ハ乃ゆよ道殺を塩飽を八恵良押寄をたのこおゲー。と
かふこの天魔よこりうませとも乃ちーび。城をかくまりくさぐるよ。
宮軍乃方ゆく。時ーを源氏乃もげーかりーよ多く。ゆめぐりの囲
を構をちうんとをう。大門を迫よ大つけくさひーよ。ちふよた
がうび軍兵走おゆよ。ゆりる郎佐うそ。多くの軍兵もうちとう
ぬ。さくも山風の吹かうくいとうらく佐うーまるよ。中門よもゆゑ源

てゆよ者人も責人がうく。結うたるも郎くや佐うゆん。郎くさ。ぐーいちう
ひくもぐう乃る元。中門乃搦よ冠装束たる貴人乃三人まぐいぐ
おこーいとくれ者ゆげて若くのこまく。彼八是を道殺をう。
我ハこれ兄ゆく塩飽をう。押寄をたのこおひくゆ城よこりうく
ぐるが。天の内いくび北のと元又いくび。ゆ今源氏ゆ彼ゆ
をこひをうく。黄金をまうくまうゆうと若うをうくせたのひ例
よ北ゆ庫乃る宮女と北げ元をくまり。是八不動尊親をなう。
是をくゆくをうーかどゆとげぞ佐うよ。ゆ今使ひをるうとのさ
おひ。方ゆぬ元くさ郎ーたるひ。さそれ兄弟乃を八恵良山猟
さうゆさくかれ乃。さる乃源氏をう形かどゆくをこて

遠ざけ、くもぐるよ。あるのがんぢんなもぐび火をこ、燒通りてもぐる
まるよ。軍兵よりなく槽とふ槽よりあ沢ほり。只往るる沢ぐるの乃を
ひけとく。よこにそぶけく佇るまに。幸嘗くく中のそにひりて。
さりとも五體沢おし、をひとりふくに惠吏押猪も橋よのぐる。
岩よまぐれく死ることみえたり。さくもあ沢たぐ杉沢おかし強
を猪う梅毒沢うがちく。二王の五體ぐらびよ押猪うかぐ沢岩の中よ
ア引あ、てハもぐれどいく燒えぐれて沢又閔親王乃五體ハもやく火
乃うちにまぐれたるふるむ。僧よ五裏の燒のとりくゆのこゆり
とくいるる夜のとりをも燒集、てこせをむ。又二王の五體ハ今
吳今協乃内よ沢るいく燒たぐらゝをんさているる人の體ぐも

行れ貴沢とりく燒集し。これ沢押猪ゆりとそ沢かりむよ。沢うハ正
しをぐらむ。又押猪が家人よ名ぐる沢民士乃さむらゆ沢。十人ばかりの貴
を伐く大方よ燒たぐらゝくりそかう。大乃よ名番亀もぐらバ。今殺の
大ハハりあれちくまひるると人ナさむよ。上乃所裏吏あつくもぐん。
猪ども緑かうりをむ筋ゆりとよくゆ沢あくてゆるゆ。今丸村を
これ沢きく。よく切ひめぐゝたりと殺へいくまよゆも押猪ハ逃ゆぐ沢
遠ゆもゆくぬよ。宮くゆきのうちよまぐれうせるん。是歌くゆ沢く
沢ゆのゆくびぐ。さゝバちゆせんとそ。二王乃五體を猪ゆうか沢ゆくく拔く
沢。燒のとりくをぐる拔ども。をゆるゆく。彼方ハ方燒燥らゝ。又こる
たかゆくさかきさがく。貴ゆ貴沢ひりつめ。をこゆも押猪よ必つ



おくをとぐらんをとくみるよりのく恢るぞひとろ行る所。恢ざるかこだち
又金鏡たづらし。女乃裝束どもの窃くおくもづる所。年もさるぞ死
西洋とうく。抑るどの燒たづまてくたる所ひ死おくく。石碑四郎左
よ恢つくべくし搗へ。押搗ゞ以下乃首十人よ死さまよつうきく。ひとつ
く名洋きつくく札洋之軍兵の行動洋四し。旗洋之鋒洋之。
戰よ搗る住保をのべ。四洋かうう家を燒ひ。鎧をうちゆらしくく
行動洋惡く。御田洋ひうう石山洋戰。元宇治を樋川を焚う。
京良山洋越く京よ入りぬ。左右の兵衛督之向ひく。ゆどりを
四し。戰乃行うさよ。始終委細奏しれば。天皇大師山ぢ居ひ。
よくことゆげぜびとうてハ四うし。二至乃四騎。ゆうびよ石碑四郎左

の四騎ハ御位乃例ををうし四騎く。四騎ゆ仕を。又押搗をもし
め以下の首ハ位保の大乃よ京く。札洋をくる所ゆ死まくきつ世よ
とのくまゆ。又金九材を軍物物初ハ。四騎よめされく四恩賞
を蒙う。軍兵どもハ例よまるせく。孫ひつくたまひう。世の中いと
きづうよるうよる。

第六條

恵美押搗遺孤を洋ひ。伊吹山
に住る白猪老翁洋あづう年原

官軍いく責く。中の重乃岩門よ入つ死くもづる死。ゆのれゞ
家人のうちよ年比ゆりひたのある武士十人ばう住うる洋まね

きくゆるハ軍いとせまのれり。代押勝をうるべ。官軍千万乃勢
行ともいなもく伐滅く退散しもぞくんが祝をかくたのこきこえ
まのくく不意おそ〜ませり。又考丸角麻呂こりふの乃ゆかく必をを
惜こをり。おのれよれ身のうく沈たのこまれくく死ねり。今ハ主沈おを
ゆ代かこみ代逃れ時沈伝居くんを遠ぐべ〜。仲麻呂親よ使ひめ
とく。王沈頂をり。さくくかるを附乃ためよ重をこ〜おける沈船沈お
〜くいとそくく返る泥沈うち越よりさてをを山信の八十間よさ
〜くゆく。かる沈潮ち者人の岳よち〜ぐり〜かバ沈より逃ひ来る
人もなべ。王行るをづみのひ〜ほどよ。軍兵ふかるくく頂をりくく。
ちの日乃又つぐさ伊賀山の禁あ到る。人皆疲れるまバ拘食んとそおく

〜紀家よりくく。某沈男ひ沈沈男ひく。先鋒を奏くく食をよ沈や
ゆると関くバおく〜紀老女が渦酒をそをれとふ沈者ハとハバ何もなく〜べ。
代処ハ山の猟夫のこ位何りまくく。大型乃糸ハをれども。幸菜一房ハ
ゆり植べ〜ともせべ。代老女が奪のゆ。これも彼猟夫まくゆ。色ハ林まま
じをくく考沈とり。衆ハ山よ入くく歎沈附とりゆ。又ひ乃よひをくく考を
〜まバ。山の猟夫乃おりをみのおそ代。ゆをくを乃猟夫をめかく。大
ゆる猟沈かまく。宮殿をくく。おそ〜まバ。沈きをるれバ国のちもちろ
〜めをべ。貢るどもせべ。又何乃猟もをべ。いとゆけきをり。沈石
ハ白猟とゆるり。代老女が奪もをるのちゆ沈人をくゆ加る。をりく
ハめをれくく王の沈軍ハ形るるり。代歌もー沈とよ乗りるるや。

又山の猟よおくくやけるゝ。又老婆ゞ狼の住るハ。王の姫乃けぶ頼ひ来ふ
ゝ。仏よめうれくゝ。ハ今歌けを婆一人ひくく行の出家ちは
ゞ。いうせんとや間よ。打ち死山乃王ひ来ふ人ひくく。鑑篇ハ拾ひと
むとひくゝ。死の山乃猟ゝよひひよりるかもとふ云けうゝひ。弱ひと銀
かけちよ猟暴猟ひそくく。榜の家よ榜乃抑第ゝ。結ふ第の家ゝ
帝うくく。家の子を八抑ちくく。抑ひ死濁ふ声して老婆ゝ待ふひ
つゝん。を歌ハ山風さつゞくよ。庵も精を暮ら。精死ちくく。三
度射たゞくくゞふよ。惜死祇兼をうゝひつふひ鑑篇ゞとう
れふよ。おゞ山の祇をいとひくくうゝひつ。家乃ふくう
婆ふ婆ゝ遠ゝよ。上空ゝよ抑ちけそ。おやゞけようちよりり。

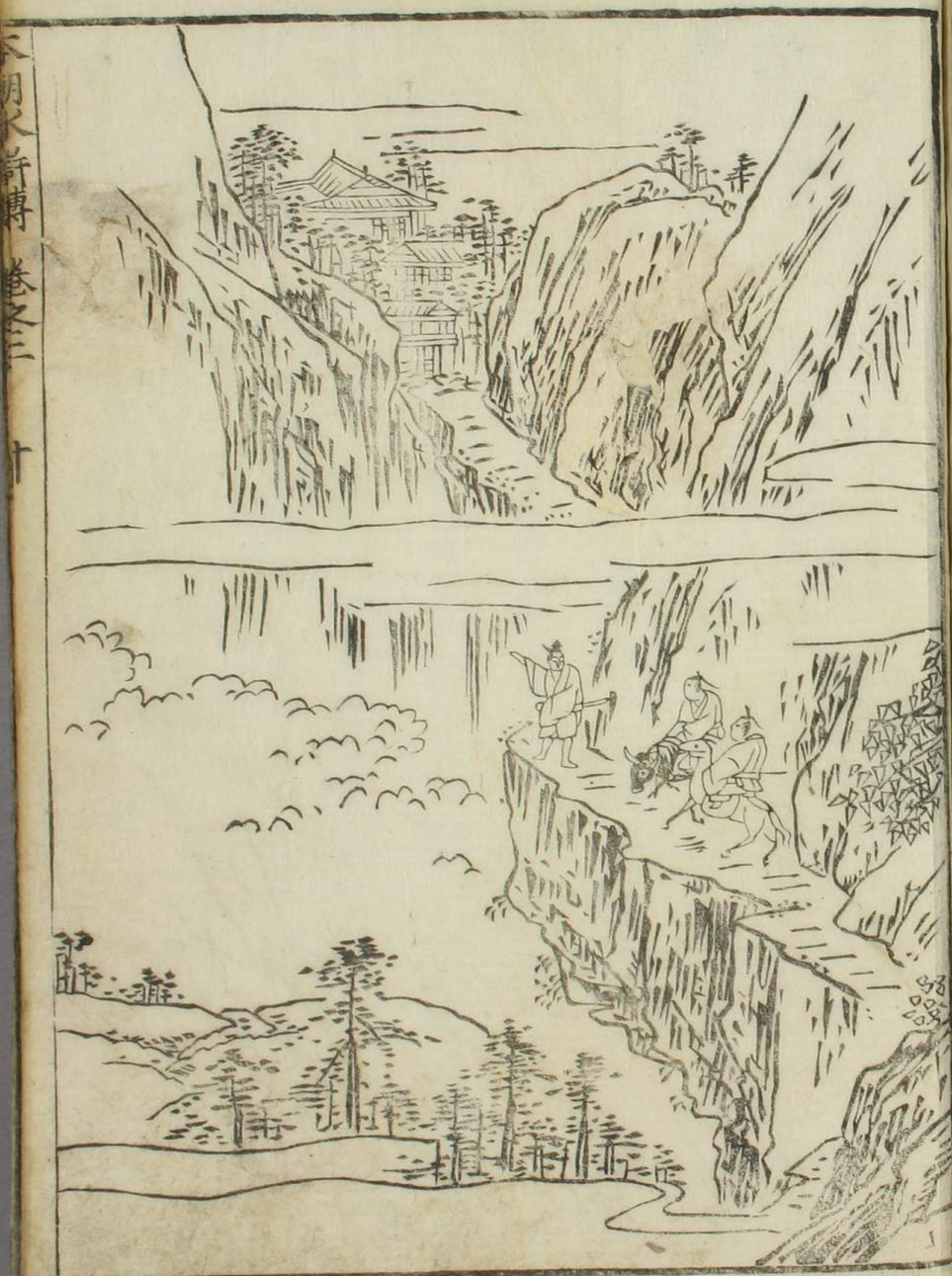
ゝ老婆子を八行方よりの賓客ゞふ。を八先つゞ山乃沢踏たゞくく
来ふのふ人くふりゝと。仇たふのふとくく。祇沢ゝ。祇笑ひ。弱考させ
てめふふり。濁ハ濁濁をうくくひよ。濁者ハ濁ひのよつ死くく。老婆ゞ
とゞゞがうゝ。ふえとりくくをれりとふ。聟笑くく濁者ハ鑑篇よを
くふハ行ゝゞ。いゞくふくゝとくゝ。ハ沢さく剤ゝくく。結ふ乃ゞとくたゞ
ゝを。ふくく。古墨よりくくさゝ。賓客ゞ。ハ軍兵ふを。いくくゝ血
乃つ死くふふ。ハ沢。さハ軍にうちまけくく。ひよ隠れんとくゞまゞれ
来ふのふふゝん。今老婆ゞとゞゞ。ハ沢ゞうきこえたりとふれゞ。を婆
細きくのふゝん。銭を八猟丈乃王ふくく。ハ沢をそれどが。風人ふを
ゞりがりたゞふよ。たとふうゝちめくく。迷来りのふふもあれ。そなど

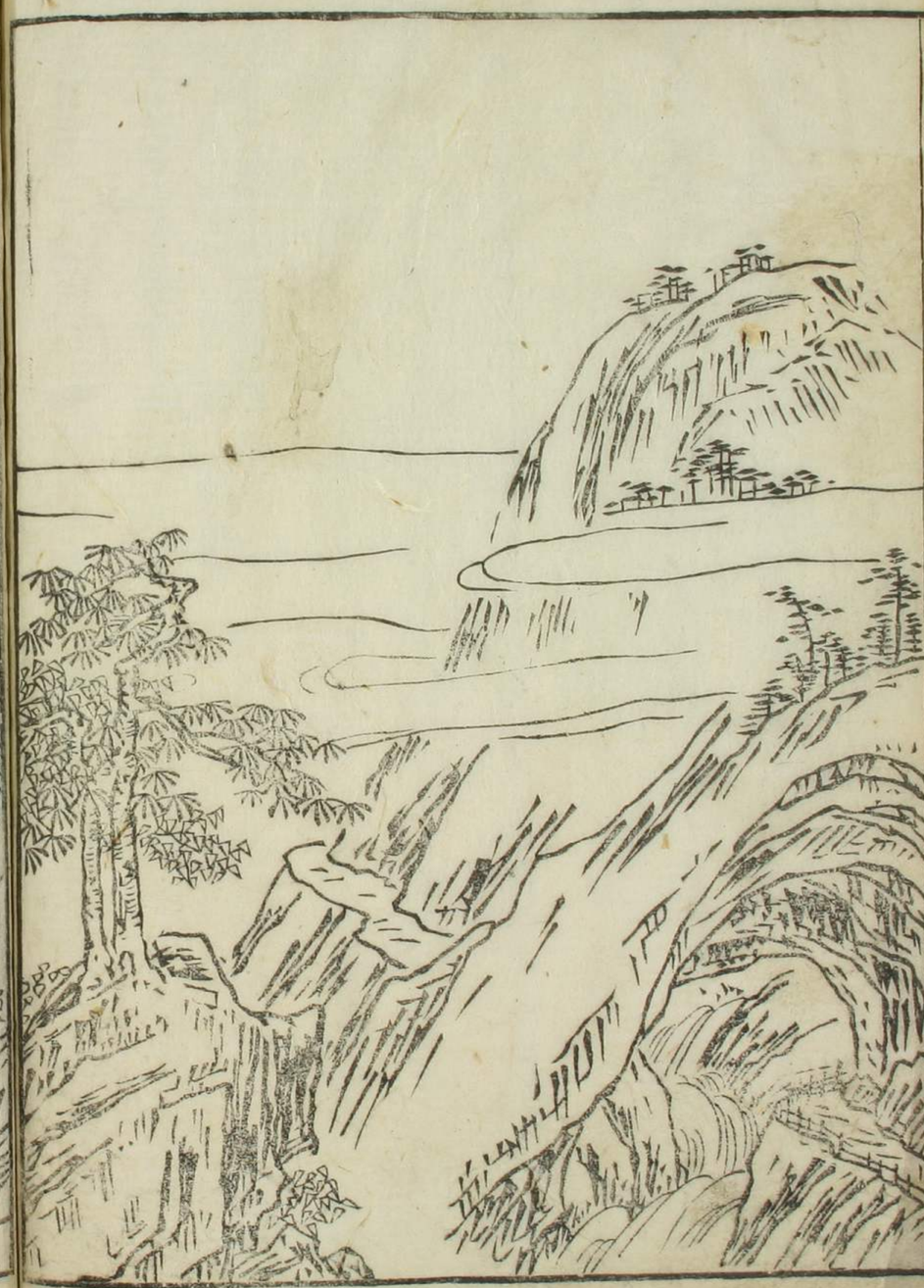
のうちよりハ武士のかたわらんもはをしへべんれバそもしハ主乃仲
眼をたれてまゆをくつの死人をバ武士のよる死人をバ猟夫よ
しそ。爲おもつひゐん。さらくハ却の主ハ猟夫るれバよる死乃のう
と却がさんがこれみてまくハ猟乃ふくらかるこの柳乃ゑを死代
をどりひりとうくやまゞ老婆がいとく。今聲がきこえをぶさま
なりゝ。山よかこれんと却がさハ。聲よちゝべさせくまのかたよ
れたくゝ。男乃うゝ体るゞ死ゝうとゝいふよ。柳物却りひめゞひむ柳
あれバよくこそをくたまるゝさゝバ出ちゝべこのみ弟ゝせんとゝハ聲
きくゝ山ハりとゝめゞうてゝ行くゝ。乃ハ平板よゝそれどゝそこをゝくく
ハ林木ゑいとゝふくゝ石祠でゝくゝ立かさるり。岩代ゝそう姐をは

うひ。却指をゝうゝ石稿法かゝくゝ。雲霧をあゝ死よ別ゝく。幸蔵
してのゞるゝ乃ゝれバ。月ハよくてゝうゝくゝ付れど。本紙弟くゝ立さうえ
ゝれバ黄班とゝどゝ死るゞみくゝさむゝふ武士だちハいゝるゝも志治
りゝん。却びたる貴人乃いゝよ却ゝてゝまゝさんとゝハ老婆なくゝちゝべバ
殘をおゝくゝ。ハ林の彼方よゝ。の紀年却る猟夫乃ゝそゞる。ちの半代
ゝとひゝく。貴人を八ゝ弟せをゝむ。ちのうゝゝも殘情ゝみゝまゞハ兵
子牛のゝとゞるをもゝとひてゝまゝゝせん。又猟松ゝどもゝるゝてハゝう
ゞと。慈悲よゝきゝこゝゆゝよ。ゝゝくゝうゝ。ゝゝさゝるゝを情ゝみゝもゞゝん。今却乃
うゝちゝよゝそのゝゝゝりゝきゝみのゝゝゝちゝよ弟ゝうゝうゝん。ゝゝゝバ半二ゝゝゝとひて結
ゝとゝく。殘一ゝゝゝハゝゝゝゝゝせバ。これハゝゝゝとゝりゝとゝて。ゝゝ。三百法ゝとゝりゝく。おゝよ

きろ沢バかりに手綱をよいひとりく老婆よりたりさくを妻
ゞ行くキニ沢ひとせ繼松どもいと多くおくまくキよりつけ
るどゝ。王ハ此身のいと軽く世ゝよりキ乃皆よ衣沢うち綿るどゝて
のせをう。押物ハ身の切りられバ。祝牛よ帯り聟ハ繼松を抱く花
よを軍兵ハうちづゝく彼ひつる山よかるよ。ゆつるハいとさもく
かく行むよハいと疑くもなるかを。六月廿日ばかり乃月ハ。山のそよさ
しのやりたるよ。ナドかゝ夜乃ひるれバいとくをゆるる。涼沢風
吹りく。毎のゝまびゆきるゞ沢。苔のあをもるかよきをゆとたりくゞ。
めゞりゞだりくハ石行沢ゝきう。家の松風ハ手弁みと切りバめゞり
のゞりくハ木の根よとりもゞり。物凄るどのうちつをる生バ牛より

かゝ沢ゝうしをりくゆよ沢ひゝ沢く殆よゝう。家根をひあるを水をバ。
軍兵とも夏ひをりく行よ。暁ちくるゝたゝん。森の鳥花をゝく
ゆく声をゝるよ。の様ども移りくゆるり。旁沢くあくいゞをもつあぬ
よ。聟ゞ絶行沢ゝう。行く多りつ死ぬとゆふさくゝれバ手のを死げ
に樗めく家もをう。石垣うちたゝみたるうよゝ垣ゝをゝ。琴抗
ゞよりそ行くをゝをけゝ。かく人の崇て来る沢苦ゝるゝ心持ち
と切り死人の様よりゝ見沢ゝうしく。波のいと大きゝる沢いをゝゝ
めくうちゆゝうしたれバ絆をさげ綿沢拭ひげたる人のいくゝゝ
もあるく。仏の人ゝ乃のゞゝゝるゝゝと問ふ聟ゝくゝ岩ハお
のれゞ俊ゝう。ゝ死人ゝ沢崇門しく系れり切りきゝみよゝくヤ





たゞ人といへバ。朝霧のまがひに論ぜバなんぞかし。鉾の柄かくといひ
し其侭門にひらきて賓客を迎へしといふ押勝まづ牛より
おり。おほきみにいでたちし。しわびたる衣かいつくろひ。御冠
をめさせ。礼正しくしく。ひとつふたつ唐の紫の皮を履したる男乃
礼正しくしく。ひまぞやまりあむかひて此方へと申し押勝おほきこゝに
供なり。軍兵ども後につきゝまゐるに。鳴丈乃おりふしきみまゐらん。
其の木の皮かさにてつくりたる冠に其麻かく織りたる袍の其深くる袂
其袴ハ狭きを穿たる麻にそでにハ麻をおきて紐のまをひおくる姿。
押勝も申しぬれバ雅やかに見えつる兄乃豊成にたがへれど。ハいかにとハ
すべて是政ハ三十年以前に難波乃浦に落く死したる胡都とおもひつ。

うちあつぱにもこりもたがハざれバ。かくうちむかふハ恵美の押勝なり。上坐
にありしまれが吾子道鏡禅師すく。おもしまれそこハ我兄乃豊成すく
やおもれといへバ。はりハ礼儀をおもされ趣あがり押勝が面体みえく。君
ハいかのごとせれまへさ。しかバ面影乃ならじ。此ひまざ綿閉みくむずると
されど冠しる面ざしもかはらじ。是ハいかなるぞ我の人乃つくりとてハ吾
されど我のかまいひつゝるにせまつ。藤原仲麻呂こそ。天皇の御寵愛あつく。
位ハ大保右大臣にに任られ。又家ハ大職冠よりこのかた。国にたぐひなく
此人をハとりて押へ軍にハうち勝の功ありとく。藤原恵美押勝と名のりひ。
そのうへ御寵愛のあまり。一位に授け大師に任じ給ふ大政大臣之となりん。
さるかの後にきたりまいり。かくかく吾子の名代つかふまつる。

て。山乃かたれよハまよひあつる。おりひけでとくうちあるくよ。押猪氏
あらのゝと行り出り。さく稲兄の義ハ雅俊乃所よおびれうせのひ
ぬとうけのゝりしに。いろのくうかゝ原ハ行りさまよハゆるりとハ。老義
後藤おとこ。後ハかく寒くれども功勲ハ。秋ハ功もなく。後ハ功もなく
くてかく山ごりり乃老義とゆり。後ハたるよ。弟乃所のも面伏るさて
も仕る後かゝるし。所兄代バかりこみなれども。後ハりとうく後ずで
きこえおらん。雅よ三十年ぢうのむかゝ。おのれいとくて後
ゆるとゝ公のゝよりとく。雅俊よ。ありうくさむらひゆるよ公のこと
をとび。嘉秋殿とでありてゞうし。同後者のお婦とゆ。拓女よ引さく
ゆうしに。多くの妨宮殿うしゆるひ。人球敬兄世の控殿そむ兄く

さむらひゆるよ。ある秋ひそかよそのお婦とゆ後ハ世堂みや
ゆるよ。このゝ世よかれきこえんゝ後ハ忍浦人をかゝひ。ゆ後代
かゝひ者。雅俊のあよ後ハ。ほたうべくきゞりゆるが。あゝく
おちくあよりぬとヤなかし。さくそのお婦後ハおく。おゞのち
八濱賀の里乃領所よ後れ。其後ハ方ゆく。後ハたるよりく。
ひ山乃縁文ありうしがいつとおくかくありあゞくゆよ。そのお婦も
お石敷。今ハひとゝの姫後さくまりけくゆよつ兄くハ。天下りし
さゆがくゆるゝべやゝびゝ後ハたる。ゆひゆるく。ゆ後ハたをけゆう。
民後めぐみつゆありて後ハたる南後世よたげんびと。ゆひゆく。
さゆ後ハ人とゝれバ堂後山後のりのをめ入く。鹿ゆりつひ

てゆよ。今ハ我汝王と称へて、かゝる所に有人千人にこえぬ。さてかく山
かりの宮まにハをれど、兵器ハかつとも多くたくはへおき。又帑樓に
こそあれ。かく縫ひあてさせて、むかしのさがを汝やつし侍れバ、さるを
かくおもひけぞ。太子乃おりましたるをしびに、汝が身のりたるも、たまつ神
祖の捨てぬぬるりとて、天ハ今だ地にかへて浮ずるによやまれば、むまれ
此れどりづらひくゆに。悟りもたがはざれバ恐れあり。妻の宮女ハ伊月瑞
いるべしとて是へときこゆるに。盗賊ども礼儀正しくかしつくろひておね。
王姫われきこしめしてくいと縁らかなり。我舎人岩丸角丸二人ハ兄宮子
岩焼王なるなびに我道祖の名に背く。鍛冶師としてあざむかれしかバ。我
又あやしく世にかくれまぎらはし。今より宮の汝ら頼みときこえむとのたまひ

されバ、かしこまりぬ。さて此主が名ハ、深くかくしていはに。
是なりたるハ、其妻と娘のみなり。君にも又白精老丈とよびてをしのぶ
べし。さて此家居に仕へんもかの山に住まり、只猟夫どもがとりてきつる
鳥獣のみなりとぞ。かくて酒の上にまた汝きたらくまでたてまつる
御をく。押勝にハ足ぬ汝たる饗膳も次なるハ、これひとしく竈をさ
て此家のうちにハ、山鳥・雉子・兎・猪・山羊なりの肉汝かり。菜ハ百合
筍・葛・薯蕷なりど汝かりたり。酒ハ清酒と濁酒あり。酒肴ハ鮓なり。澤
蟹・防風と虎杖の類よりひたしるぞ。山桃・毛桃・栗子をもあつ汝
ち家よかくおせり。王汝もじめなりて、押勝より寡になるよいてるぞ。
飲食なりて日もたるくさしのかりて、昨夜ハ秋通よいねなさてかく

梁山泊のがりたるあとうろんぞ。まやバ。ちづまるこせ
きゝん。押獄も軍兵手も先うちるびきたるくとそ。とるくそのかるく
なるんちける

本朝水滸傳巻之三終